

2009年(平成21年)

第23号

(11月15日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安
 〒605-0041 京都市東山区三条臈上
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

京都教会教会発足50周年 記念式典盛大に開催

『光・絆・翔』をテーマに11月1日、京都教会において、1700人近い会員と、100人を超す来賓を得て、教会発足50周年記念式典が開催された。

青年女子、同婦人、壮年部員合わせて23人による奉獻の儀に続き、中村憲一郎教会長を導師に読経供養が行なわれ、啓白文が奏上された。次いで、石田恭子さん(青年婦人部長)が体験説法。長年離れて暮らした母親の看病にあたる中で自らの思いを見つめ、親孝行の大切さを感じた体験を発表した。



講話に立った酒井教雄参務は、よき仲間を持つことが幸せにつながると強

調し、「多くの人を仲間に誘い、たくさんの方が幸せになれるよう50周年を機に新たなスタートを」と呼びかけた。このあと、ガンディー開発財団のエラ・ガンディー女史が講演した。祝辞には来賓を代表して小林隆彰氏(日中韓国際仏教交流協議会理事長)、水谷幸正氏(仏教大学理事長)が述べた。

最後に全員一同で「夢 堂々の心旅」の大合唱、力強い東山普門太鼓の演奏で新たな精進を誓った。



小林隆彰氏



水谷幸正氏

エラ・ガンディー氏の特別講演

50周年記念式典に、エラ・ガンディーさんの講演が行われた。エラ・ガンディーさんは、インド建国の父といわれるマハトマ・ガンディーさんの孫娘。南アフリカから24時間かけて、前日に京都に入られた。

本会の庭野開祖が世界宗教者平和会議(WCRP)を開催するにあたり、ガンディー氏の取り組んできた「非暴力・不服従」の精神から学んだことが大きかったと述べている。

また、エラ・ガンディー氏自身も、一昨年、京都国際会館で開催されたWCRPⅧに委員として出席されており、そのご縁もあって、今回、京都教会の50周年記念

式典に特別に講演された。

その中でガンディー氏は「他者に対しての理解が薄い限り戦争が起こり暴力が起こる。宗教の違いや様々な違いを理解できる我々になって行くことが大切。



これらを解決に導くのもWCRPの取り組みである。それは様々な宗教の代表者が集まっているからこそ取り組める。そしてWCRPにかかわる一人一人が信仰を深めることで力や富に対する執着に対するを離れて社会に貢献することが大切」と述べた。

十月二十三日から二十五日にかけて、中区のギャラリー「しまだい」で、京菓子協同組合青年部による京菓子の展覧会「絆」京菓子が結ぶココロと心」が開催された。この展覧会は、創部四十五周年を記念したもので、会員二十六人による工芸菓子・創作菓子に会場内は興奮で満たされていた。京菓子の伝統を基本に若い人の新しいアイデアを加え、和歌や歴史などを題材にした和菓子が出品されていた。目で見ただけでは、その奥にある歴史を、そして、食べるとおいしさを味わえる、和菓子にはそんな楽しみ方があると教えられた。現代は、スナック菓子やファストフードの流行りの時代だ。このようない時代だからこそのゆっくり味わう大切さを京菓子が学んでほしい。

時 事 刻 々

新宗連京都府協議会による他教団訪問（円応教）

10月19日、新宗連京都府協議会の年間行事の一つである「他教団訪問」が実施された。今年、円応教本部（兵庫県丹波市山南町村森1-1）を訪ねた。

京都駅に集まった参加者はバスに乗り、名神・中国自動車道を経由して、1時間半ほどで円応教本部に到着した。一同は「五法閣」で休憩した後、「本殿」を参拝し、「御教祖様御墓所」をお参り、「慈照殿」を見学して、円応教独自の「修法」を参加者が実体験した。

円応教にて用意していただいた昼食をいただき、午後からは円応教の沿革と教祖・教主、立教の本義、教義について学んだ。

ほんの数時間の訪問であったが、参加者は円応教の説く「世の中の道具」となるという教えに接し、お互いの教えの底辺に流れる、共通性を見出し、新宗連のメンバーとしての一体感を感じ取った。



慈照殿



教義を学ぶ



本 殿



御教祖様御墓所



「ゆめポッケ」の総数発表（2009年10月18日『佼成新聞』より）

「ゆめポッケ」（主管・青年本部、教務局社会貢献グループ）で全国から寄せられたポッケの総数がこのほど発表されました。6月1日から8月31日までのキャンペーン期間中、全国各教会では立正佼成会の小・中学生が中心となってポッケ作りに取り組み、その数は3万9170個に上りました。

今年で11年目を迎えた「ゆめポッケ」は、紛争や対立で傷ついた世界の子供たちを勇気づけるため、おもちゃや文房具を詰めた手作りのポッケをおくる取り組みです。ポッケ作りを通して、家族でいのちや平和の尊さを語り合い、思いやりの心を育むことも目的に掲げられています。

3カ月にわたるキャンペーン期間中、全国各教会では配布地域の現状についての学習会を実施したあと、

小・中学生が中心となり、家庭でのポッケ作りや中身の収集、手作りカードの作成などに取り組みました。全国から寄せられた3万9170個のポッケは今後、配布地域や配布個数の決定を受けて輸送準備が進められ、今年末から順次日本を出港することになっています。約2カ月かけて現地に到着後、本会とつながりの深いNGO（非政府機関）や国連機関を通して子供たちに届けられます。

また来春には、本会会員による「ゆめポッケ親子ボランティア隊」が派遣され、子供たちに直接ポッケを手渡す予定です。



今回は「諸宗教対話～開祖の願いをこの京都の地に～」をお休みとさせていただきます。

他教団活動紹介

（中外日報10月31日より）

●解脱会関西道場が落慶

解脱会関西道場で26日、落慶式が執行された。昭和26年に移築した旧道場の老朽化を受け、会員から1億6千万円の浄財を募り、道場を解体新築。関西の布教拠点を一新した。落慶祝賀会で岡野名誉顧問は「皆さまのご理解をいただいたの建設。解脱金剛様（岡野聖憲会祖）もお喜びと思う。大勢の人にお参り頂き、社会に役立つ人材が育てば」と挨拶。

京都教会 あの日あの時



昭和62年10月

四条通りや河原町通りの1車線を交通規制にし御旗を先頭に平和万燈行進を行ないました。写真はその後円山音楽堂で集結し、舞台上の纏・万燈、客席の笛・鐘・太鼓が一体になった様子です。

50年前（1959年）の出来事：厚生省は「小野田寛郎元少尉は死亡」と調査終了した。（その後1972年に発見、1974年に救出）

仏教を生活に生かす

《仏性を拝みだす・・・菩薩行》

庭野開祖は「菩薩行の出発点は、すべての人に『私も仏さまに生かされている仏の子だったのだ』と、目覚めて頂くことです」と教えて下さいました。菩薩は仏さまの使いです。仏さまの子であり、仏さまの使いとして、仏さまと同じように人々を拝み、仏性に気づき、人々の中の仏を見つけて人生を歩むのが菩薩の生き方です。

ですから、本当の菩薩行とは仏性の花開かせる縁となることです。そして、自分もそういう生き方がしたい、という心を起こさしめることです。「仏になる」という目的のために生きているのだ、ということがきちんと分かり、心がそこに定まっている人が菩薩です。

そして、それを毎日の生き方の中で、具体的に現していくことが菩薩行です。また、人さまの苦勞は菩薩行であり、その奥の本質は光り輝く仏性であると見られる人、それが菩薩です。

菩薩にとっていちばん大切なのは、言うまでもなく愛他・利他の精神であり、その精神から発した実践行動であります。その実践行動を〈布施〉というのです。

何年も家に引きこもったままの息子さんを持つお母さんがいました。まわりの皆さんは、長年苦勞しているお母さんに幸せになってもらいたくて、何とかして息子さんに働きに出てもらおうと、一生懸命にかかわっていました。これを、庭野開祖が言われた菩薩の眼で見るとどうでしょう。

わが子とはいえ、その息子さんを愛し、息子さんのために苦勞したのはお母さんです。息子さんがここまで生きてくることができたのは、お母さんの努力のお蔭さまなのです。そういう眼で見ると、このお母さんは菩薩さまであり、今までの苦勞は菩薩行だったと言えないでしょうか。

仏の子としての価値を本当に現すのは、慈悲の心を起こし、慈悲の行いを実行するときなのです。

こちらが〈教えてあげよう、直してあげよう〉という気持ちを捨てて、改めて、このお母さんを拝む温かい気持ちでふれ合ったとき、お母さんの今まで辛かった気持ちがすべて解けていきました。

すると、息子さんに思いもかけない心境の変化が起こり、自ら仕事を探しに出かけて行ったそうです。このように、庭野開祖が教えて下さった本質を、実際の生活やかかわりの中でそのまま生かしていく、それが大切です。

菩薩とは、人を救い世を救うことを念願とする人ですから、迷ったり苦しんだりしている衆生を、その場で救って下さることにまちがいはありません。しかし、根本的な救い、真の意味の救いは、「本仏に生かされているのだ」ということを自覚する以外には起こりえないのです。

庭野開祖は「まず人さま」という菩薩行を、私たちに教えて下さいました。私たちは、本当は仏になる道を歩んでいる菩薩だったのに、それに気づいていませんでした。そこで庭野開祖は「幸せになりたかったら、まず人さまだよ」と、先に菩薩の行いをさせて下さることで、本来私たちの中にある菩薩の心に気づかせ、目覚めさせて下さったのです。菩薩の行いをすることで、私たちが菩薩に近づいていきます。

ある教会に庭野開祖が立ち寄られた際、お役を頂いたばかりの若い青年男子部長さんが、庭野開祖にうかがいました。「青年男子部長のお役を頂きました。何をしたらお役が務まりますか」とすると庭野開祖は腕組みをされ、それから力強く「いいか、きみ以上に法華經に惚れ込む人を一人育てるんだよ」と言われました。

以来、この青年は、教えの素晴らしさをお伝えすることをいつも心に置いて、自分自身が法華經をしっかり学び、お役を務めました。現在、教会長のお役を頂き、多くの方とのご縁を頂くなかでも、庭野開祖のこのお言葉を信仰の指針としているそうです。

また、こんなこともありました。庭野開祖が海外へ出張中に、お供をしていた秘書の方のお父さまが亡くなりました。同僚がすぐに呼び戻そうとしましたが、お母さまが「息子が帰っても、主人が生き返るわけではありません。どうぞ、大事なお役をそのままさせて下さい」と言うので、秘書さんがお父さまの死を知らされたのは、帰国されてからでした。

帰国して間もなく、庭野開祖がその方の自宅を訪ねました。そして、驚くお母さまの前に手をつけて「この度は、息子さんを父君(ふくん)の死に目に会わせることができず、本当に申し訳ありませんでした」と、頭を下げられたそうです。

「ご自分は、尊い平和のために世界行脚をされているのに、休む間もなく、わざわざ私たち家族のために足をお運び下さった。何ごとにも誠意を持ってあたられる、そういう開祖さまだったからこそ、私は師とも父ともお慕いして、ここまでついてくることができたのです」と、その秘書さんは話していました。

「まず人さま」と、われを忘れて誠意を尽くす庭野開祖の姿が、まわりの人に菩提心を起こさしめるのです。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《日本政府への三つの要望》

ベルギーの首都ブリュッセルから東へ列車で一時間ほど走ると、緑に囲まれたルーベンの町に着く。京都での第一回会議は、世界の宗教代表が世界平和のために一堂に会して語り合っただけでも大きな意義があったのだが、このルーベンでの第二回会議は、そこからさらに一步を進めて、「宗教と人間生活の質」を基調テーマに「平和のために宗教者がともに活動するため」の討議が集中的に行われ、大きな前進が見られた。

今でこそクオリティ・オブ・ライフ(人間生活の質)という言葉が環境問題と共にさかんに使われるようになってきているが、欧米の宗教者の先駆者的な時代の読みには脱帽させられることが、たびたびあった。こんなこともあった。子供の健康にとって母乳が大事なことは知っていたが、人工ミルクも栄養があつてそれほど悪いものだとは思っていなかった。

ところが、発展途上国への援助と称して大量の粉ミルクが送り込まれたことで、その地域の母親たちがみんな赤ん坊への授乳を母乳から人工ミルクに切り替えてしまい、そのため幼児の病気に対する抵抗力が弱まり死亡率が上昇してしまったという。

途上国では医師の数が少ないから、なおさら深刻な問題で、その粉ミルクを製造している会社の乳製品に対して不買運動を起こすべきだ、と欧米の宗教者が力説するのを聞いて、びっくりさせられた。不買運動はともかく、そうした社会問題に直接かかわっていく考え方や行動力に、庭野開祖は多くの刺激を受けた。

またヨーロッパの宗教者の方も、日本から宗派を超えて六十人もの宗教者がルーベン会議に参加したのを見て、目を見張った。平和憲法を持つ日本の宗教者の訴えが、各国の宗教者の胸に強く響いたのは確かだった。しかし一方「**日本は自分を安全地帯に置いて平和を唱えているのではないか**」という厳しい問いかけもあった。ヨーロッパは二つの世界の対立を肌にじかに感じている地域なのだ。

ノーベル平和賞を受賞した英国の軍事問題専門家のフィリップ・ノエルバーカー卿も、ルーベン会議に参加された。そのノエルバーカー卿からこんな要請があった。

「広島・長崎という二つの原爆の被爆体験を持つ日本の方々には、平和のためになすべき特別の役割があります。現在の世界では軍縮に対して技術的に解決できない問題は何一つありません。しかし、武器を捨て、平和を願う強い人間の意志がなくては軍縮は不可能なのです。そのために、日本の政府への私の三つの要望を伝えて頂きたいのです」

ノエルバーカー卿の日本政府への要望とは「**米国が日本にどんなに核兵器を造ることをすすめても、日本はそのお金を平和のために使いたいと拒みとおしてほしいこと。広島原爆記念日に、日本政府が各国の首脳に対して、広島メッセージを直接手渡ししてほしいこと、米ソの軍縮交渉に対して、日本政府の立場から新しい提案を国連に示してほしいこと。この三つをぜひとも日本政府に伝えてほしいのです**」

庭野開祖はノエルバーカー卿に約束した。「日本はいつでも核兵器を造れる技術を持っているでしょうが、造らないのです。なぜなら、核拡散に反対だからです。必ず、あなたのご要望を日本の総理にお伝えしましょう。これは日本の宗教者の役割です」かつて英国の陸軍大佐まで務めたノエルバーカー卿は、軍拡の愚かさを知り尽くしておられる人であった。

その四年前だったと思うが、日本は核拡散防止条約に署名はしたものの、批准はまだなされていない状況下にあった。いつの日か核軍縮からやがては全廃への道をと願う私たち宗教者にとって、核の不拡散はその出発点となるものであった。

アメリカの核の傘下にあつて、核のない平和を唱えるのは矛盾だという声もある。だが、それに惑わされることなく、核不拡散のためには「**造れるが造らない**」という信念を貫き、同じような立場の国々に連帯を呼びかけて「**全廃への道こそ世界の趨勢(すうせい)**」という気運を醸成してもらいたいものである。

地球ができて六十億年、その長い時の流れの中で、いま、ここに、こうして生まれあわせた不思議な縁を大切にしたいではないか。「**一期一会**」というが、「**六十億一会**」のこの有難い出会いをよくよく自覚して、**核によって恫喝(どうかつ)しあう愚かさに思いをいたすべきだ**。と庭野開祖は考えるのである。(つづく)

渉外部からのメッセージ

お陰さまで無事50周年の式典を終えることが出来ました。記念団参から始まった今年1年間の集大成です。細かいところを言い出せばキリがないと思いますが、準備万端で迎え心配だったのは当日のお天気のみ。素晴らしい晴天に恵まれ会員さんもぞくぞく参拝に訪れました。しかし昼前頃から怪しくなり式典終了後は

ずいぶん雨が降っていました。「雨が降る」が転じて「振り込む」「幸せが振り込む」と言われ、節目のときに雨が降るのは縁起がいいのですね。何もかもが仏さまの計らいの中にある…そう実感した1日になりました。この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266